

河童(かっぱ)の話を、繰り返しいろいろなところで書いているが、次の「河童の神様」と題した文章は、新聞への寄稿記事としては、新聞簡潔にして明解である。少し要約して、箇条書きふしに引用してみよう。

①世にいう「河童」なるものは、書画などによると妖(よう)怪変化(へんげ)のようになつて、その本質を、たどつて行くと水の精、川の神様に行きつくる③(3)軽い十三湊などでは、「御水虎様(おしつさまよ)といつて、たくさん祀(まつ)づつられている④河童は、古くから「水の主」として、「みづち／みづしなどと呼ばれて、人々からあつい信仰を寄せられてきた。

⑤河童は、もとは水の神様(「みづし」)の零落した姿であるといふことがで、長崎の老岐屋や他の島々では、旧暦五月の「川祭り」には、川や井戸に供え物をし、若者は相撲をとり、日影を踏みつて太鼓を叩いて精靈(河童)を慰める(7)事と見るべきだろ(昭和十一年五月「朝日新聞青森版」)。

「川祭り」の河童と折口信夫（その一二）

□な  
ら□  
**民俗通信**

西村  
博美

□ 254 □

▼――川の殿――  
さて以下は、前回記した  
「川祭り」の続きである。森口  
武男は、昭和十一年にち  
て河童に出でて、  
院国文科の最終学年にな  
つていた。当人の日記か  
ら、母親の河童の役であつ  
たことが分かる。  
「舞台に出てる時は腹を  
大きくして一回入り、次  
に三人の子をつれて出て

は第二回「川祭り」(昭和十一年六月)のため、書き下ろし台本にに戦後、折口によつて手を加えられ、国学院創立記念年十一月十四日、月四日)で上演されたときのものであるらしい。『折口信夫全集』ノート、第六卷、「川の殿」の筋書きを少し追つてみる。

東北の川祭りの水虎像を手にする  
折口信夫(昭和10年)



## 時勢批判や風刺込めて

八年)の冒頭を景花は、  
次のように説いていた。森川武里  
(沈鐘)(春陽草、一九〇〇)  
「山中、樅の大森林。左の  
方、奥は千丈。右に怪  
しき巖一座。傍らに湧き  
出づる清水の深き池あり。岩の上に山姫居す  
まふ。」一方、折口信夫が書い  
た「川の殿」台本の、同じく  
冒頭部分。  
「正面に、大きな岩組  
み、西側に水草の群生、幕  
あくと、異様な怪物、巖を  
擱り削ろうとしている。  
唄ひわかつて、正面に向く、  
大きな河童なり」。  
こうして二つを並べて  
みて、「山姫」と大きな  
河童(の人物)とそ違う  
水際の巖(岩)を前にし  
て、あるいはその上にい  
る役で出演した、もう六  
鈴木さんは、「河太郎

森口武男は、歌う。「力  
ツバのからだに風が吹く  
ワーライ、ワーリカツ  
パは堤でございます/ち  
ょううちよがカツバにつき  
あたる/とんぼがカツバ  
につきあたる/「どうし  
つつきあたるの/おかあ  
さん」/「カツバは/すき  
とおつているからさ  
まはたれにも見えないか  
らき」(詩集 カツバのあ  
いさつ)「これは、折口先生の、  
河童劇をなさるお気持ち  
を書いたのである」と森  
口武男は、言つていた。  
いまは、あの河童たち  
も折口も森口も私たちに  
は、だんだん見えなくな  
っていく。

この「川の殿」なる劇の  
台本から、もう一つ気べ  
くことがある。ドイツの  
戯曲家ハウプトマン作

る主人公の登場となるところは、どこかよく似た舞台設定になつてゐる。なにせハウプトマン氏、池に住む妖怪に「ふれかけつきす」と鳴かせているのだ(折口がそれを河童の声に借用していいまる)。妖怪や妖精、はたまた精霊たちの大勢が登場するこの二つの物語を比べてみて、折口が強い關注を寄せていた泉鏡花とのつながりを見る上で、興味深いものがある。ちなみに泉鏡花には、「目の中に河童の居る事」という話がある。

▼「カツバのあいさつ」

「笑いの爆笑が講堂に続いていた。白秋さんが前の列で、みじかいからだを後ろにたおすようにして、大きな口を開けて

殿のことを「ぶれけだけさ」と叫んで飛び出しましたよ」と、よく覚えさせておられた。

「うらかに『ハルミ』と告(の)らす声聞こゆ師の家に寝(い)ね。」夜明けたり(森川武男)。昭和十二年春、森川は、「お前はもう卒業するやから、泊(まつ)ていき」という折信夫の東京・大井町の家に泊めてもらつた。「ハルミは折口と同居する藤井春洋。その折口家の玄関の間の神棚間に、一対の河童像が鎮座していて、折口が亡くなるまで祀(はづか)れていた(写真参照)。それは昭和十九年の秋、五所川原から三湊まで、「水虎様(おししき)」を求めて(巡礼)」日青書付

森口武男は、歌う。「力  
ツバのからだに風が吹く  
ワーライ、ワーリカツ  
パは堤でございます/ち  
ょううちよがカツバにつき  
あたる/とんぼがカツバ  
につきあたる/「どうし  
つつきあたるの/おかあ  
さん」/「カツバは/すき  
とおつているからさ  
まはたれにも見えないか  
らき」(詩集 カツバのあ  
いさつ)「これは、折口先生の、  
河童劇をなさるお気持ち  
を書いたのである」と森  
口武男は、言つていた。  
いまは、あの河童たち  
も折口も森口も私たちに  
は、だんだん見えなくな  
っていく。

参考。それは昭和十九年の秋、五所川原から三湊まで、「水虎様（おじしきさま）」を求めて「巡礼（じゆれい）」した折口（おがたぐち）が出精村（えいしむら）永田（ながた）といふ村の河童像（かわとうじやう）を夫婦（めおと）の某仏師（ごふぶつし）に模刻（もくこく）させたものであるという（『河童』）。

殿のことを「ぶれけだけさ」と叫んで飛び出しましたよ」と、よく覚えさせておられた。

「うらかに『ハルミ』と告(の)らす声聞こゆ師の家に寝(い)ね。」夜明けたり(森川武男)。昭和十二年春、森川は、「お前はもう卒業するやから、泊(まつ)ていき」という折信夫の東京・大井町の家に泊めてもらつた。「ハルミは折口と同居する藤井春洋。その折口家の玄関の間の神棚間に、一対の河童像が鎮座していて、折口が亡くなるまで祀(はづか)れていた(写真参照)。それは昭和十九年の秋、五所川原から三湊まで、「水虎様(おししき)」を求めて(巡礼)」日青書付